

9月6日 Bad smell , But 住める？



午前中は班員はプレゼンの内容を考え、僕は発表原稿の英訳の手伝いをした。
午後にランドフィル。午後からはタマサート大学の学生 3 人をガイドにお願いして、バスでタマサート大学から車で 10 分ほどのところにあるごみ集積場に行った。本当なら 10 分ほどで着くはずだったが道に迷って一時間弱かかってしまった。途中の道路に、世の中をさまよう霊のお家となる「サン・ペアン・ター」が有り、タイの死生観にまた興味が湧いた。



集積場に着きドアを開けると、異様な臭いがバスに乗り込んできた。腐った卵の臭いもいたのだが果物や野菜が腐った臭いの勢いが強かったように思う。よくこんな臭いのところで作業ができるものだと思ったが、友達が「鼻は敏感すぎてすぐに順応するから、カラオケボックスでトイレに行って帰ってくると部屋の臭いが気になるが慣れてくると気にならなくなる」と言っていたのを思い出した。集積場ではスカベンジャーの人たちがゴミを選別する作業をしていた。おそらく欲しいゴミだけを持っていくのだろう。意外だったのが彼らが協力し合って役割分担をして作業していることだった。なぜ組織立って作業しているかという、この集積場で働くスカベンジャーはこの集積場を運営する私企業に雇われた人々だからである。スカベンジャーは一人一人ゴミ袋を持ってゴミ山の上を中を歩いていると僕は思っていたので、スカベンジャーがみんなで役割分担をして作業しているとは思ってしなかったのだ。また、集積場には子供が5、6人ほどおり、彼らは作業員として働いてはいないらしく、「ヘルパー」として居るらしい。詳しいことは聞けなかったのだが子どもたちが遊んでいる様子から推測するに、たぶん子供たちは働いてはいないのだが何か手伝うことがあれば小遣い程度のお金をもらったりしているのではないだろうか。このスカベンジャーは私企業から提供された家に住んでおり、生活もそれほどひどくないようだった。ゼロパーツショップのあるオンヌット14ライ地区の人の話にもあったのだが、スカベンジャーは悲劇の主人公などではなく、むしろ仕事に誇りを持ったり、笑顔で人と接したりしていて、「普通に」生きているということに思いが巡った。僕が行ったスラムや合った人々はまだ良い生活環境・生活条件の人たちなのだろうと思うが、そういう人もいるということが僕には大きかった。

そのあとは10分ほどでAPTUに帰って、またプレゼンの英訳の手伝いとプレゼンに入れる写真の提供などをした。英訳の手伝いにあたり、班員の言いたいことをしっかり理解することが必要になることが実感された。寮に帰ってからも班員の一人の英訳を手伝った。疲れたので11時には寝た。

